



Title	音声・音韻レベルの切り替えについて
Author(s)	阿部, 貴人
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2002, 36, p. 45-61
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56575
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

音声・音韻レベルの切り替えについて

阿 部 貴 人

1. はじめに

本稿は、青森県弘前市方言話者の、同じ地域方言話者との談話と異なった地域出身の話し相手との談話に見られる音声・音韻項目を言語変項とし、スタイル切換えの能力を記述することを目的とする。

これまで行なわれてきたスタイル切換えの研究では主に文法形式を対象として、切換えのメカニズムが明らかにされてきた。また、同時にいくつかの課題も提出されてきている。本稿に関わる課題としては、渋谷（1998：14）でも述べられているように、ある言語項目の切換えのメカニズムが他の言語変項でも同様に働くのか、といった一般化に関わる課題がある。

「他の言語項目」とは、文法形式はもちろんのこと、音声・音韻項目も含まれてくる。事実、本稿が対象とするインフォーマントにおいては、音声・音韻項目の切換えと文法形式の切換えにおいて、切換えのありかたに差異が認められるのである。本稿は言語項目として音声・音韻項目を取りあげることにより、この課題についての当該地域での回答を示し、一般化への布石としたい。

本稿では、音声・音韻項目のうち、有声化現象を言語変項として取りあげる。その理由は、音声・音韻項目の多くが「共通語化」しているのに対

し、有声化現象は「共通語化」せずに保持されている言語項目であるためである。

以下では、まず分析の対象と資料を提示し、先行研究で指摘された有声化現象に関わる制約をまとめることによって分析の前提を示す（§3.）。次に方言談話における有声化現象の結果をまとめ、有声化現象の切換えに関する環境を分析する（§4.）。同時に文法形式の使用状況を示し（§5.1.）、共通語談話における有声化現象と文法形式の切換え状況との異なりを分析・考察する（§5.2.）。

2. 分析資料

本稿では話者AKと話し相手（表1参照）の一対一の会話（調査者は同席していない）を分析資料とする。話者の組み合せは表2の通りである。表2のように、便宜的に津軽方言話者との談話を「方言談話」、非津軽方

[表1 インフォーマント情報]

	年齢	性別	居住歴
AK	43～ 46	女性	0-：青森県弘前市
MA	65	女性	0-：青森県中津軽郡西目屋村
AN	51	男性	0-13：青森県南津軽郡浪岡町 13-18：同県弘前市 18-22：東京都 22-：青森県弘前市
FM	85	女性	0-60：東京都 60-：神奈川県
OM	24	女性	0-18：山口県 18-22：東京都 22-：大阪府

[表2 話者の組合せ]*

	話者	話者間の関係
方言談話	AK-MA	MAはAKの母親
方言談話	AK-AN	ANはAKの配偶者
共通語談話	AK-FM	FMはAKの義弟の義母
共通語談話	AK-OM	OMはAKの息子の婚約者

* 各談話の収録時間は30～40分

言話者との談話を「共通語談話」と呼ぶことにする。なお、談話資料の無声子音／有声子音の判断は発表者の判定による。

3. 分析の前提

本稿の分析対象である有声化現象とは、東北地方や北関東、鹿児島の一部などで見られる現象であり、これまで「共通語の語中の無声子音音素/t/と/k/が有声子音となる（それぞれ/d/と/g/で実現される）現象」である。

具体例として、以下に老年層話者との談話例をあげる（下線部が有声化現象）。

0322AK T（人名）シカ、ワケガモ ワガネナー。

[T（人名）より、若いかも 分からない（知れない）なあ]

ただし、共通語に対応する/t/と/k/のすべてが有声化するわけではない。有声化現象が発生した理由¹⁾から、語中でのみ見られる現象であるはずであり、また前後の音素は有声である等の条件が存在することになる。

井上(1968)、斎藤(1992)、渡辺(1984)などの先行研究では、有声子音で実現されない条件が提出されている。しかしながら、それぞれの条件には例外が報告されているものもある。そこで、本稿の分析対象である方言談話と共通語談話において、先行研究で挙げられた条件が常に無声子音で実現されるのか、あるいは無声子音で実現されることも有声子音で実現されることもあるのかを表3にまとめ、常に無声子音で実現される条件を切換える対象から外すこととする。なお、表3の「カテゴリカル」とは常に無声子音で実現されることを、「可変的」とは無声子音で実現されることも有声子音で実現されることもあることを示している。

表3のように、音環境の【語頭】【/Q/の後】【[(-)CV_NC₂V_W]】における

[表3 本稿の資料における各条件の状況]

		カテゴリカル	可変的
音環境	語頭	●	
	促音音素（以下/Q/とする）の後	●	
	撥音音素（以下/N/とする）の後		●
	長音音素（以下/R/とする）の後		●
	[(一)CV _N C ₂ V _w] における C ₂ *1	●	
語種	漢語		●
	外来語	●	
形態素の切れ目の後 *2			●

*1 表中の V_Nは母音が無声化しており、C₂は無声子音であるという条件が必要

*2 有声子音で実現されるのは形式名詞的な「コト・トコ・トキ」や助詞類

る C₂]、語種の【外来語】は、常に無声子音で実現されていることから、

§4.以下の分析では対象とはしない。

一方、【/N/の後】【/R/の後】【漢語】【形態素の切れ目の後】は、前掲の先行研究でも例外が指摘されており、本稿の分析資料でも可変的な条件である。したがってスタイルの切換えにあずかっている可能性があるため、分析対象とする²⁾。

4. 分析と考察

以下ではまず方言談話における有声化現象の状況を提示し（§4.1.）、次に有声化の切換えに関わる環境を分析する（§4.2.）。次に共通語談話の分析から切換え関わる要因を分析する。

4.1. 方言談話の結果

以下では、有声子音で実現された場合を vcd、無声子音を vls とする。

方言談話は、インフォーマント AK にとって最もカジュアルなスタイルであり、共通語談話への切換えのベースとなる談話である。

方言談話（対 MA、対 AN）の vcd と vls の分布状況をまとめたものが表 4 である。表のように、方言談話では当該の音素はほぼ vcd で実現される。

[表 4 方言談話における vcd / vls の分布]

	実数	%
vcd	755	99.5
vls	2	0.5
計	757	100

vls であった2例は、§2.3.の【形態素の切れ目の後】の形式名詞的な「トキ」の第一子音/t/である。形態素の切れ目の後でも vcd である形態素については§3.2.1.で述べることにする。

0624AK：ン、ア、ムゴニケルトギガ↑。(婿にやる時か?) [MA 談話]

0700AK：ウン、アレ、コナイダ、コサキタトギ、(この間、ここに来た時) [MA 談話]

なお、§5.1.の(a)で後述するが、方言談話では、逆接の接続助詞を除く言語項目はほぼ方言形式のみが使用されている。したがって、方言談話では有声化現象・多くの文法項目は方言的要素が主に用いられているという点で共通している。

4.2. 共通語談話の結果と考察

4.2.1. 切換えに關わる環境

まず、表 5 に共通語談話における vcd / vls の分布状況を示し、表 5 の

[表 5 共通語談話における vcd / vls の分布]

	vcd	vls	計
FM 談話	263 (74.3)	91 (25.7)	354
OM 談話	536 (91.9)	47 (8.1)	583
計	558	158	716

表内の () は%、横の合計が100%

vcd／vls の分布状況の音素別の内訳を資料 1（本文末）に示す。

表 5 のように、方言談話ではほぼ vcd であったが（§4.1. の表 4）、共通語談話では vls の割合が増加し、切換えられていることが分かる。しかしながら、その割合は高いとは言えないことから、切換えを促進する環境ではなく、方言的要素が残る環境が何かといった観点から分析・考察を行なう。

結論から述べると、有声化現象の切換えには以下のような関連・傾向がある。

(a) 内容形態素か機能形態素かといった形態素の種類が関連する。

(b) 機能形態素の場合には形態素の切れ目の直後ほど切換わりやすいといった切換えの傾向がある。

まず(a)について資料 1 を見ると、機能形態素は vls への切換えが起こりにくいうことが分かる。ただし、井上（1980）で述べられているように、動詞や形容詞の語幹は他の動詞との類推によって本来有声化しない音環境を持つ場合でも有声化する³⁾。また、語幹だけでなく活用語尾もほぼ切換わっていないことから、パラダイムに関わる形態素は切換わりにくいといえる。

内容形態素の頭子音（形態素の切れ目の後）が vcd になることはないのに対し、先行研究で指摘されている【形態素の切れ目の後】の場合、つまり、機能形態素の場合は形態素の頭子音であっても vcd となるものがある。例えば、形式名詞的な「コト・トコ・トキ」、並列の助詞「ト」、疑問の助詞「カ」などであり、その多くは vcd となっている。

助詞の vcd／vls の状況を表 6 に示す。

[表6 助詞の vcd / vls の分布]

	vcd	vls		vcd	vls
か(疑問)	19	1	たら	2	2
かな	2	—	ても	2	—
かも	1	—	と(並列)	6	3
から	18	1			

*2拍以上の場合は下線部が有声化の対象である

表のように、形態素の切れ目の後でも有声化する割合が高いことが分かる。

次に(b)について見てみよう。形式名詞的な「コト・トコ・トキ」の頭子音も有声化することがある。形式名詞的な「コト・トコ・トキ」にはぞれぞれ/t/ /k/が1つずつ存在するが、三形式の分布状況には「コト」対「トコ」・「トキ」といった対立が見られる。

形式名詞的な「コト」「トコ」「トキ」の方言談話・共通語談話の vcd / vls の分布を表6 に示す。なお、表内の網掛けしたセルは、AK に内省調査を行なった結果、その組み合せが不適切で許容されなかった（そのような発音をすることはないと内省された）ことを示す。また、C1は第一子音を、C2は第二子音を示し、() 内にそれぞれの実現形を示している。

まず「トコ」「トキ」では、次の二点が注目される。

[表7 形式名詞的な「コト」・「トコ」・「トキ」]

《方言談話》

	C1 : vcd C2 : vcd	C1 : vcd C2 : vls	C1 : vls C2 : vcd	C1 : vls C2 : vls
コト	— (godo)	24 (goto)	— (kodo)	— (koto)
トコ	9 (dogo)	— (doko)	— (togo)	— (toko)
トキ	15 (dogi)	— (doki)	2 (togi)	— (toki)

《共通語談話》

	C1 : vcd C2 : vcd	C1 : vcd C2 : vls	C1 : vls C2 : vcd	C1 : vls C2 : vls
コト	— (godo)	13 (goto)	— (kodo)	— (koto)
トコ	2 (dogo)	— (doko)	5 (togo)	— (toko)
トキ	1 (dogi)	— (doki)	2 (togi)	— (toki)

- (1) 第一子音が vcd で第二子音が vls の組み合せ ([doko] と [doki]) が許容されないこと。
- (2) 方言談話ではほぼ第一子音・第二子音ともに vcd であったものが、共通語談話では第一子音が vls、第二子音が vcd の組み合わせの割合が高くなっていること。

§2.3. のように、有声化現象は有声である前後の音素に合わせて有声化したと考えられる。形式名詞的な「トコ・トキ」の場合、第二子音は有声の（この場合は母音）音素が前後にあり、有声化する環境にあるといえる。しかしながら、第一子音は形態素の切れ目の後であり、前の音素が有声であるとは限らない。つまり、前の母音が無声化している場合や前の音素が /Q/ のように非有声である可能性がある。

したがって、第一子音が vls で第二子音が vcd の組み合せ ([togo] [togi]) となることは有声化の環境としては自然である。しかし、第一子音が vcd で第二子音が vls となる組み合わせは原理に合わないこととなる。その結果、(1)のように談話でそのような組み合わせが使用されることはない（内省でも許容されないことには注目に値する）。

ただし、上述のように、方言談話／共通語談話では第一子音・第二子音の両者が vcd の組み合わせが使用されること、つまり形態素の切れ目の後でも有声化することが特徴である。しかし、(2)のように共通語談話では第一子音が vls、第二子音が vcd という組み合せの割合が高くなる。したがって、形態素境界の意識が存在しないわけではなく、次のような切換え

の順序が存在していると考えられる（ただし、本稿の資料では③の段階は見られない）。

	①	②	③
トコ	dogo	→ togo	→ toko
トキ	dogi	→ togī	→ toki

方言談話で主に使用される①から、共通語と同様の③へと切換わるのではなく、②のように形態素の切れ目の後だけを切換えており、形態素境界が切換えに関連しているのである。

同様の傾向は接尾辞でも言える。「たち」の結果を次表に示す。

[表8 標準語談話における「たち」の+V／-Vの分布]

	C1 : vcd C2 : vcd	C1 : vcd C2 : vls	C1 : vls C2 : vcd	C1 : vls C2 : vls
たち	2	—	2	3

しかしながら、「コト」はC2がvcdとなる組み合わせが許容されず、談話でも使用されない。談話資料では[goto]のみである。東北から新潟、北関東にかけての地域は、文法化が進んだ結果として「コト」が対象格一般を表示する用法を生じさせている（日高2000）。『方言文法全国地図』では、対象格として「コト」類が回答されている津軽地方、新潟県北部、福島、栃木、茨城ではC1・C2の両方がvcd、C1・C2がともにvls、C1がvcdでC2がvls([goto])であり、C1がvlsでC2がvcd([kodo])は見られない。現段階では「コト」の有意性に対する答えを持ち合わせていないが、対象格との関係も含めて分析する必要がある。

5. 文法項目との対照

5.1. 文法項目に関するまとめ

本節では、本稿の対象である有声化現象との比較のため、文法項目の切換えの分析・考察を挙げておく。本稿の分析資料から、以下のような結果が見出せる。

- (a)方言談話では、一項目を除いてほぼ方言形式のみが使用されている。
- (b)切換えのありかたとして；
- (b-1)カテゴリカルな切換えが多い。
- (b-2)カテゴリカルな切換え・連続的な切換えのいずれの場合にも、共通語の形式と方言の形式を一对一で対応させようとする。したがって、方言と共通語の、形式と意味・用法にズレがある場合には、方言でも共通語でもない使用が観察される。

次節ではこの文法項目の切換えと有声化現象の切換えを比較し、その相違点を考察する。

5.2. 文法形式との切換えの異なり

本節も結論から述べると、有声化現象と文法形式の切換えは、次の二点で差異が見られる。

- (i)方言談話では変項X、共通語談話では変項Yといったカテゴリカルな切換えであるのか、話し相手によって変項X・Yの使用頻度が相対的に異なる連続的な切換えなのか。
- (ii)連続的な切換えである場合の切換え率が高いか低いか。(切換わりやすいか切換わりにくいか)

§4.2.1.の表5のように、非津軽方言話者との談話には切換えの割合に差が認められる。本稿で対象としたFM談話とOM談話は、これまで行

なった AK と非津軽方言話者との談話調査の中で切換えの割合が両極に位置する談話である⁴⁾。これは、有声化現象が話し相手によって使用される頻度が異なるといった連続的に切換えられる変項であることを示している。しかしながら、§5.1.の文法形式の切換えの分析では、文法形式には方言談話と共通語談話においてほぼカテゴリカルな切換えが見られる項目がある((i)の異なり)。

また、文法形式の中にはカテゴリカルな切換えだけでなく、連続的な切換えの様相を見せる項目もある。連続的な切換えにあずかる文法形式と有声化現象の切換え率を図1に示す。

[図1 共通語談話における切換え]

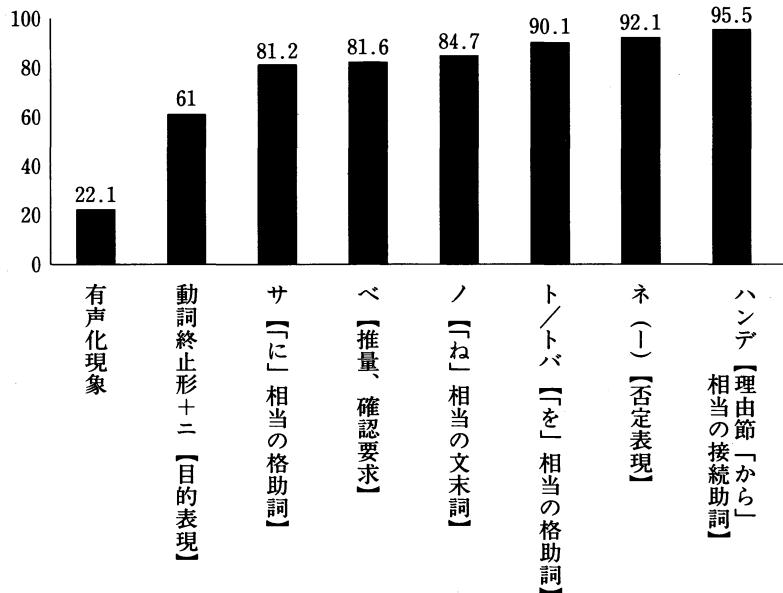


図1から、有声化現象は文法形式に比べ切換え率が低い(切換わりにくい)ことが分かる。また、有声化現象から理由節の接続助詞までの項目の順序は、FM談話とOM談話で共通している。つまり、スタイル切換え

にあづかる言語項目には切換え率といった点で順序性が存在していることを示唆している。

ではなぜ有声化現象は文法項目よりも切換わりにくいのであろうか。

本稿の分析から見出された文法>音声・音韻といった切換えのしやすさは、国立国語研究所（1953）に見られる方言の共通語化のスケールと一致する。

のことから、共通語への切換え能力には、方言の共通語化と同様の普遍的なメカニズムが働いている可能性が伺える。

なお、§5.1.の文法項目のまとめで、方言と共通語の形式と意味・用法を一対一対応させようとしたことを述べたが(b-2)、有声化現象はそもそも方言/d/と/g/が共通語/t/と/k/にそれぞれ一対一で対応しているため、切換えを妨げる状況はない。したがって、AKに対して、談話資料を用いて確認すると、無声子音に切換える能力は存在することが確認でき、さらに有声化については文法形式以上に注意を払うといった内省まで聞かれる。

これは計画せずに行なった談話内で、実際に注意がどの程度払われるのかといった点に違いがあると思われる。意識と実際にズレが見られるのである。本稿ではこの注意度をモニターのかかり方と呼んでおく。

ただし、有声化現象ではモニターが働くかしないというわけではない。共通語談話における直接引用発話の結果を表8に示す。なお、表内の「話者→相手」とは引用された発話の話者と、その発話が向けられた相手を示している。したがって、Aは津軽方言話者が津軽方言話者に発した発話をAKが真似たもの、Fであれば非津軽方言話者がAKに対して発した発話をAKが真似たものとなる。また、vcd／vlsで実現された具体的な語の内訳も合わせて挙げている。

[表9 直接引用発話における vcd / vls の分布]

話者→相手	vcd	vls	vcd の語	vls の語
A 津軽→津軽	4	1	道 [1]、分からな い [1]、へた [1]、 途中 [1]	へた [1]
B 津軽→AK	2	—	へた [1]、迎え [1]	—
C AK→津軽	3	1	横浜 [1]、うち [1]、行こう [1]	できる [1]
D AK→非津軽	—	3	—	二泊 [1]、いくら [1]、こと [1]
E 非津軽→津軽	2	1	疑問詞どこ [2]	中 [1]
F 非津軽→AK	—	2	—	二泊 [1]、600 [1]

内訳の〔 〕内は頻度数

頻度数は少ないものの、非津軽方言話者の直接引用（非津軽方言話者の発話を真似る発話、E・F）では、すべて vcd となる疑問詞「どこ」以外は vls となっている。また、AK の非津軽方言話者相手の発話(D)も vls である。

このような状況が見られるのは、直接引用発話が発話の再現であるために、発話への注意がはらわれやすく、特に話し相手が誰か、話し手が誰かといった点にまで注意が払われているためである。

6. おわりに

本稿では、青森県弘前市方言話者1名の方言談話・共通語談話の分析から、有声化現象の切換えについて分析し、文法項目の切換えとの違いについて考察した。本稿の分析・考察を再度簡潔にまとめると次のようになる。

《有声化現象の切換えに関する環境》

- ・内容形態素は機能形態素よりも切換えやすい。
- ・機能形態素を切換えには形態素境界の有無が関係している。

《文法項目の切換えとの違い》

- ・カテゴリカルな切換えではなく、連続的な切換えである。
- ・連続的な切換えの様相を見せる文法項目よりも切換わりにくい。

二つ以上の文法項目の切換えのあり方を明らかにするとともに、音声・音韻項目と文法項目の切換えのあり方を比較・考察することによって、少なくとも一個人のスタイル切換えのメカニズム全体の解明に貢献できると考える。

ただし、対象とする話者が1名であるため、津軽方言話者に一般化することができるかといった課題が残されている。特に年齢差による差異は大きいと思われる。筆者の資料では、老年層はより切換わりにくく、逆に若年層はカテゴリカルに切換えている。これはスタイル切換えの能力に差異があるためであると考えられる。スタイル切換え能力の差異については、年齢別の分析から考察していきたい。さらに、他地域との比較についても今後の課題である。

注

- 1) 井上（1980）では以下のように述べられている。

日本語では原則としてCVCV……のような音節構造を持つ。つまり子音と母音とが原則として交互に並ぶ。そして母音は特殊な環境を除けば有声である。つまり声帯振動を伴う。従って語中の無声子音は多くは有声子音に囲まれることになる。ここで、もしもこの子音を有声化すれば、声帯振動を子音部分で中止する必要がなく、母音+子音+母音の調音の間中続けてよい。従って [aka] にくらべ [aga] の方が発音が単純であり、楽である。いわゆる「最小努力の法則」にもかなう。

- 2) なお、方言形式の場合、有声子音で実現されていてもそれが有声化現象であるか否かの判定が困難であったり、もはや無声子音で実現することが不可能になっているものがある。例えば、方言形式バグル（＝交換する、取り換える）は [bagwrrw] であって [baŋ] ではない。津軽方言（東北方言全般も同様）では語中のガ行は [ŋ] /ŋ/となるが、バグルが [g]/g/

であることから、「グ」がガ行(鼻音系列)ではないと考えられる。カ行(非鼻音系列)と見ることができるとしても、現代では無声子音で実現されることはないと認め、対象とはしなかった。一方、アスペクト接辞のチュー／デューは、先行研究の制約であげた音環境によって分布が異なるため、有声化現象と認め、分析の対象とした。

- 3) 本稿の談話資料で比較的多くの活用形が使用されている「聞く」を例にとると、音環境による制約が働いた場合、「聞く」の言いきり、ナイ形、命令形は下表の「A」のようになるはずであるが、実際の談話では「B」となっている(談話資料に命令形は現れていない)。

	A			B	
	言いきり	ナイ形	命令形	言いきり	ナイ形
方言談話	kigu	kikane	kike	kigu	kigane
標準語談話	kigu	kikanai	kike	kigu	kiganai

これは、 kagu : kagane = kigu : X
 X = kigane

等の類推によって生まれ、語幹の音声を規則的に揃えたものと考えられる。

- 4) FM 談話と OM 談話のほか、15談話を収集している。文法形式の切換の詳細については阿部(2001)を参照されたい。

参考文献

- 阿部貴人(2001)「青森県弘前市方言話者の標準語スタイルの記述——コード切り替えの観点から——」大阪大学大学院文学研究科修士論文
- 井上史雄(1968)「東北方言の子音体系」『言語研究』52
- (1971)「ガ行子音の分布と歴史」『国語学』86
- (1980)「言語の構造の変遷——東北方言音韻史を例として——」柴田武(編)『講座言語 第1巻 言語の構造』大修館書店
- 国立国語研究所(1953)『地域社会の言語生活——鶴岡市における実態調査』
- 斎藤孝滋(1992)「岩手方言における語中子音有声化・鼻音化現象——言語内的・外的要因の観点から——」『国語学』168
- 佐藤和之(1986)「若年層話者に見る津軽方言の記述的研究(上)——録音文字化資料からの抽出——」『弘前大学国語国文学』8号
- 渋谷勝己(1998)「漱石のスタイルシフト」『待兼山論叢』第32号 日本学篇 大阪大学文学会
- 渡辺修平(1984)「青森県黒石市方言の音声現象について——共時論の視点

[資料1 vcd／vlsの音素別内訳]

	共通語/t/	共通語/c/	共通語/k/
vcd	後 [3]、アスペクト接 辞てる [6]、入れて [1]、助詞と(引用) [3]、生れた [1]、弟 [1]、男(と) [1]、重 ねて [1]、聞いた [2]、 聞いて [3]、今年 [1]、 言葉 [4]、助詞たら [2]、助詞ても [1]、 助詞でも [1]、聞かれ た [1]、たち(た) [2]、 出た [2]、出て [1]、 とき(と) [1]、とこ (と) [1]、助詞と(並 列) [3]、へた [2]、 また [3]、まとめて (と) [1]、まとめて [1]、まとめて(と) [1]、まとめて(て) [1]、見て [1]、やら せて [1]	一番 [2]、う ち [5]、たち (ち) [4]、た ちます [1]、 立つ [1]、途 中 [1]、道 [1]	直せなく [1]、行かない [1]、行 く [2]、行けます [1]、行こう [1]、往復 [1]、大阪 [1]、男 (こ) [2]、お腹 [1]、かかりまし た [1]、方 [2]、かも [1]、聞か ない [1]、聞かれた(か) [1]、聞 く [1]、聞けば [1]、助詞か [19]、疑問詞どこ [9]、こと(こ) [13]、静かに [1]、～学 [1]、助 詞かな [2]、助詞から [18]、助 詞だけ [5]、すごい [1]、すごく [1]、指示詞そこ [2]、卒業式 [1]、大学 [1]、高い [2]、接続 詞だから [11]、できます [1]、 とか [28]、とき(き) [6]、得 [1]、とこ(こ) [3]、中 [2]、な かった [1]、なかなか(か1) [1]、 なかなか(か2) [1]、なんか [14]、弘前 [1]、他 [1]、迎え [1]、申し訳 [2]、役 [1]、優し く [1]、安く [1]、郵便局 [2]、 よく [5]、横浜 [2]、楽 [1]、若 い [1]、分からぬ [12]、分か る [1]、悪く [1]
vls	当たり前 [1]、助詞と (引用) [1]、男(と) [1]、言葉 [6]、助詞 たら [2]、たち(た) [5]、ついて [2]、つ けて [1]、とき(と) [5]、とこ(と) [2]、 新潟 [2]、助詞と(並 列) [2]、へた [2]、 やらせて [1]、私 [23]	7 [1]、た ち (ち) [3]、た ちます [1]、 八戸 [1]	200 [1]、600 [1]、行く [1]、い くら [1]、意識 [2]、一泊 [1]、 駅 [1]、往復 [1]、助詞か [1]、 こと(こ) [1]、時代劇 [1]、性格 [1]、助詞から [1]、指示詞そ こ [1]、朝食 [1]、付き合う [1]、 できる [1]、とか [3]、とこ(こ) [1]、中 [1]、なにか [1]、なん か [1]、葉書 [1]、二泊 [2]、横 浜 [1]

表内の〔 〕はその語の出現回数を示す。

(大学院後期課程学生)

On the Change of a Sound and a Phoneme Level

Takahito ABE

The purpose of this paper is to describe the Hirosaki dialect speaker's style shifting capability through the voicing phenomenon in a discourse. Although a large number of studies have been made on shift of grammar items, little is known about shift of the voicing phenomenon. Therefore, it is necessary to analyze about the shift of the sound and the phoneme items. Furthermore, the difference is clarified by comparison of a shift of the voicing phenomenon and grammar items.

In conclusion, it was found that the following environment is concerned with the shift of the voicing phenomenon; (1) it is easy to shift content morphemes rather than functional morphemes, (2) Morphological boundaries are related to the shift of functional morphemes. In addition to these, there are following differences in the shift of voicing phenomenon and grammar items; (1) A voicing phenomenon is not a categorical shift but a continuous shift, (2) The voicing phenomenon cannot shift easily rather than grammar items.

Keywords : style shifting voicing phenomenon content / functional morpheme morphological boundary